



看護学教育研究共同利用拠点
千葉大学大学院看護学研究科附属
看護実践研究指導センター

Center for Education and Research in Nursing Practice,
Graduate School of Nursing, Chiba University

看護学教育における FDマザーマップの開発キックオフ講演会

平成23年6月28日(火)、「看護学教育におけるFDマザーマップの開発と大学間共同活用の促進」プロジェクトが本年度より開始となったことを記念して、キックオフ講演会「看護系大学の輝く未来を担うFDのあり方を問う」を開催しました。全国から77名の参加者をお迎えしました。

開会にあたり、山本恵司理事と正木治恵看護学研究科長の挨拶がありました。そして川島啓二氏(国立教育政策研究所)による基調講演「大学教育の革新とFDマップ」が行われました。まず、近年、大学数の増加および大学のユニバーサル化に伴い、学士課程における教育の質保証と責任ある教育システムの構築が求められており、それに携わる教員の教育能力の質保証が重要な課題になってきている背景が述べられました。また、これまで、FDは大学教員の自主性に委ねられてきており、大学教育全体の動向やユニバーサル化に応じて教育改善を系統的に捉えていく視点が欠けていた点が述べられました。そのため、川島氏は、FDとは、単なる授業の改善を超えて、カリキュラムの改善、組織の整備・改革への組織的な取り組みであると、国立教育政策研究所の研究プロジェクト「FDプログラムの構築支援とFDerの能力開発に関する研究」の一環としてFDマップを開発されました。FDマップは、FD実質化のための可視的ツールです。FDの対象、方法、目標等を明示し、大学個々のFDプログラム開発の基盤となるツールであり、大学の自律性・多様性との共存を図っています。FDプログラムの全体的な体系を俯瞰し、各大学におけるFDの現状把握と今後の展望に利用でき、大学教員およびFDの企画運営に携わる担当者の能力開発への見取り図となります。FDマップは、3段階のレベルと4段階のフェーズから構成されます。ミクロレベルのFDは、個々の教員による授業・教授法を対象としています。ミドルレベ

ルは、教務委員によるカリキュラム・プログラム開発を対象としています。マクロレベルは管理者による組織の教育環境・教育制度を対象としています。各々、フェーズIの導入(気づく・わかる)レベルからフェーズIVの支援(教えられる)レベルまで、段階的にFDプログラムの実施状況を診断したり、大学個々の到達目標を抽出・確認・共有したりするために活用できます。川島氏は、FDマップが開発者の意図を超えて様々な活用されてきている例を紹介し、FDマップの今後の更なる発展と看護学教育に特化した新たなFDマザーマップの開発への期待を述べられました。

次に、Sally Brosz Hardin氏(サンディエゴ大学)による講演「Trends in American Nursing Higher Education and Faculty Development from a Dean's perspective」が行われました。最初に、慣習からエビデンスに基づいた看護実践への移行、研究業績に基づく大学院の評価等を理由に、看護学部長として、学術と研究の卓越性を目標に戦略プランを立てた背景が述べられました。また、学術と研究の卓越性を示す基準として、国内外の会議での研究成果発信、学術的な出版物の発行、研究資金獲得を挙げ、それらの基準に基づき大学を評価し、具体的な目標を設定した過程が述べられました。次に目標達成に向けて、運営管理、財務管理、研究における学生役割の検討という視点から行った支援が紹介されました。例えば、ロールモデルとなる看護研究部長の採用、保健当局・医療機関との連携による研究推進、統計処理・文献検索・論文作成・競争的研究資金申請等に伴うサポート体制の構築、研究費の補助等





川島 啓二氏

です。また、学生数増加に向けた対策を講じたり、学生が大学院入学当初から教員の研究に参画し研究能力を高めつつ、博士論文完成までの修業年限を短縮できるような体制を構築されたりしていました。さらに、教員が過重な負担によって疲弊しないように、事務補佐員の増加、担当授業数の減少、授業方法の工夫、研究時間の確保等を行われていました。最後に、教員が研究活動に専念できる組織的な環境整備の重要性が示されました。

また、Cynthia D. Connelly氏（サンディエゴ大学）によるDVDによる講演「Trends in American Nursing Higher Education and Faculty Development: A Researcher's Fresh Perspective」が行われました。最初に、世界の医療専門職のうち、看護師はエビデンスに基づいた患者中心の医療環境を確立する鍵を握っており、世界の人々の健康と福祉への貢献に向けて、学際的な研究チームを構築し革新的なアプローチを開発する重要性が述べられました。そして、サンディエゴ大学を中心とした学際的で組織的な研究活動のあり方について、具体的な研究内容を紹介されました。

会場から、修士の学生に求められる卒業時のコンピテンシーについて質問があり、Hardin氏は、他領域の学位を持って看護に初めて入学しクリニカル

ナースリーダーを目指す課程と看護師免許を持つ学生が高度実践看護師を目指す課程があることを紹介されました。

最後に北池正氏（看護実践研究指導センター長）による講演「看護学教育におけるFDマザーマップの開発」が行われました。まず、看護実践研究指導センターの沿革を紹介し、センターが看護学教育研究共同利用拠点として全国で初めて認定された経緯が述べられました。また、看護学教員が実践力・教育力・研究力などの多様な能力を求められる一方、看護系大学の増加による教員不足、臨床と教育の場の異動に伴う若手教員のキャリア形成困難などの課題があり、系統的・組織的なFD活動が求められている背景が述べられました。FDマザーマップは、そのような課題の克服に向けて活用できることを意図しており、看護学に特有の内容を踏まえたFDの取り組みを整理してデータベース化し、人的・物的資源の共同利用を促進すると共にその成果を国際発信することを目指しています。北池氏は、FDマザーマップ開発に向けた5年間のプロジェクトの概要を説明し、全国の看護学教員の皆様方と連携していきたいと述べられました。

今後、本センターでは、看護学教育におけるFDマザーマップの開発プロジェクトの推進を通して、各看護系大学が高等教育における看護学教育の特質を踏まえた有効なFDを計画的に企画・実施・評価できるよう支援してまいります。



Sally Brosz Hardin氏

プロジェクトの推進状況

教育－研究－実践をつなぐ 組織変革型看護職育成支援プログラムの開発プロジェクト

【プロジェクトの概要】

平成22年度から取り組んでいます。このプロジェクトの目的は、教育－研究－実践の連携を目指した臨地実習施設の組織変革に取り組む看護職の育成を支援するプログラムの開発ですが、同時に、組織変革の核となる人材育成を支援し、臨床現場の組織問題

の解決と看護学教育環境の整備を促進することをねらうものです。

このプロジェクトの背景には、看護学教育の高度化、看護系大学の急増に伴い、大学教育に相応しい臨地実習施設や実習指導者の確保が困難になってきているという問題があります。この問題は、看護学生

の看護実践能力の低下や看護職の次世代育成機能の低下に直結することから、新人看護職の離職増加、中堅看護師の疲弊・組織崩壊へと連鎖し、さらなる実習施設・指導者の不足という悪循環を導くものと考えられます。この悪循環は、これまでのような個人の自己研鑽で解決できる問題ではなく、組織変革を推進できる人材育成に向けた支援が必要であることを意味しており、この“組織変革を推進できる人材育成”に焦点を当て、本プロジェクトは企画されました。それは、当センターの30年に及ぶ研修実績を礎に、組織変革を推進できる人材育成に向け、より効果的な研修プログラムの開発につなげていこうとするものであり、具体的な内容は、①看護実践研究の推進、②看護職育成支援プログラムの開発、③組織変革支援型研修授業の実施、④情報発信の4つから成り立っています。

【現在までの進捗状況】

平成22年度は、従来の研修事業を実施する傍ら、プロジェクトとしては主に看護実践研究を推進してきました。平成23年度は、看護職育成支援プログラムの開発に向け、昨年度の看護実践研究の成果をまとめ一年と位置づけています。

本プロジェクトが目指す“組織変革を推進できる人材育成”として、①看護の独自性・専門性をふまえた組織変革のビジョンを描くこと、②日本の組織文化の特性をふまえた教育現場と実践現場の連携体制を構築すること、の2点を実現し得る人材を育成することと捉え、看護実践研究では以下に示す2つの研究テーマを掲げました。

1. 看護の独自性・専門性を可視化するリフレクション・フレームワークの開発
2. 日本型看護教育－実践連携診断・評価ツールの開発

看護実践研究1では、平成22年度に実施された3つの研修事業（国公立大学病院副看護部長研修、国公立大学病院看護管理者研修、看護学教育指導者研修）の受講生を対象に、研修中・後の研修課題遂行に関するインタビュー調査を行い、データ収集を行いました。今年度は、得られたデータを研修ごとに質的に分析し、上級看護管理者・病棟看護管理者・中堅看護職者の、組織変革プロジェクト遂行に必要なリフレクション・フレームワークの要素を導き出しました。（第31回日本看護科学学会学術集会において発表予定）次年度以降は、これらの成果に基づいた研修プログラムを試行し、その評価を行いながら、研修プログラムをより洗練させていく予定です。

看護実践研究2は、教育現場と実践現場の連携状況を診断・評価するためのツール開発を目的としています。昨年度は、関連領域の文献検討を進め、外部講師を招いた学習会を定期的に開催してきました。また、看護実践研究2の研究課題は、日本文化に基づく診断ツールの開発であることから、千葉大学21世紀COEプログラムの成果である報告書を元に、医療組織文化と看護との関連性という観点から質的分析を行い、6つのカテゴリーを明らかにしました。今年度は、新たな共同研究員を招き、診断・評価ツールの開発に向け、より具体的な検討を進めているところです。今年度の目標はツールの原案作成であり、次年度以降、ツールの評価・修正を行っていく予定です。

今回は、これまで本プロジェクトで行ってきた看護実践研究を中心に報告しました。プロジェクトの進捗状況は、今後もホームページやニュースレターを通して報告していきたいと考えています。

看護学教育における FDマザーマップの開発と大学間共同活用の促進プロジェクト



専門家会議

平成23年度から5年間をかけて取り組みます。このプロジェクトは、医療の高度化に伴って大学化が急速に進展している看護学教育において、その特質を踏まえた体系的なファカルティ・ディベロップメント（FD）のプログラム表（以下、FDマザーマップといいます）およびFDプランニング支援データベースを開発することを目的としています。

（4ページへ続く）

今回のニュースレターでは、平成23年度～平成25年度の本取り組みの予定についてご説明申し上げます。まず、「看護学教育におけるFDマザーマップの開発」を行います。本ニュースレターの最初にも述べましたキックオフ講演会の開催、そして看護学および高等教育の専門家による専門家会議の開催を通して、看護系大学教員に求められる能力を明らかにします。次に、各看護系大学のFDプログラムに関する実態調査を実施します。これらの結果から、わが国の看護系大学教員の能力をさらに発展させるためにより強化すべきFDの内容を特定し、看護学教育の特質をふまえたFDマザーマップを開発し、さらに各看護系大学が相互に活用可能なFDの企画・実施・評価支援システムを構築します。なお、FDマザーマップを開発した後は、全国を6ブロックに分けて基幹校を選定し、基幹校を中心としたFDマザーマップの活用を検討しています。今後の5

年間の計画は、年次計画表をホームページにおいて公開しておりますので、ぜひご参照ください。また、前述の計画に基づき、平成23年7月22日(金)、「看護学教育におけるFDマザーマップの開発」に向けた第1回専門家会議を開催しました。会議のメンバーは、外部から高等教育の専門家4名、看護学教育の専門家7名をお迎えし、千葉大学大学院看護学研究科教員4名、附属看護実践研究指導センター教員6名を併せた21名から構成されています。第1回会議では、本プロジェクトの概要、看護学教育の現状、既に開発されているFDマップの概要について確認後、看護学教育に特化したFDマザーマップ開発に向けた課題および開発の方向性について検討しました。

今後、平成23年度中に会議を2回開催し、看護系大学教員に求められる能力の明確化、現状のFDプログラムの実態調査を進め、看護学教育におけるFDマザーマップ開発に向けた基盤を構築する予定です。

看護実践研究指導センターの今後の予定

●平成23年度看護実践研究指導センター事業報告会

平成24年3月8日(木)午後2時～午後4時、会場 千葉大学看護学部 講義・実習室

●看護実践研究指導センター創立30周年記念交流会

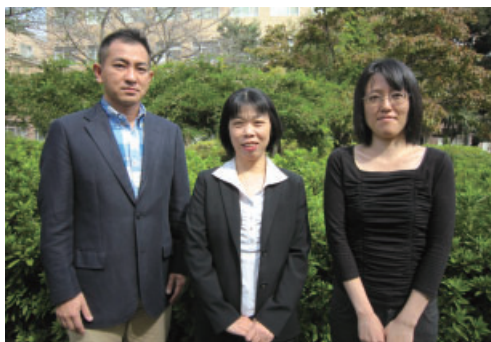
平成24年6月30日(土)午後1時～午後5時、会場 千葉大学けやき会館

●看護実践研究指導センター創立30周年記念誌の発行

※現在、看護実践研究指導センター創立30周年記念誌を編纂中です。創立時から現在に至るまで、センターの様子等の写真を掲載したいと考えております。掲載が可能な写真をお持ちの方は、メール(nursing-practice@office.chiba-u.jp)、または電話(043-226-2459 センター第2研究室直通)にてご連絡ください。

スタッフ紹介

今回は、センターのプロジェクトを担当するスタッフを紹介します。



左から 松田・河部・宮芝

特任准教授	河部 房子
特任講師	宮芝 智子
特任助教	松田 直正
副事務長	高田 健一
センター事業支援係	係長 本城 高二
センター事業支援係	事務補佐員 工藤 敦子
FDマザーマップ開発	事務補佐員 千葉 裕子
認定看護師教育課程	事務補佐員 山形 博子
認定看護師教育課程	事務補佐員 上原 文子

看護学教育研究共同利用拠点

発行 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

〒260-8672 千葉県千葉市中央区亥鼻1-8-1

TEL : 043-226-2377・2378(看護学部事務部)

URL : <http://www.n.chiba-u.jp/center/>

E-mail : nursing-practice@office.chiba-u.jp